



法務省“社会を明るくする運動”中央推進委員会主催
第72回“社会を明るくする運動”作文コンテスト

挨拶でつながる社会

岐阜県 揖斐川町立谷汲中学校 3年

植山 ^{うえやま} いろは

私が住んでいる地域のおばあちゃんパワーはすごい。おばあちゃん達は、私達を見ると、すぐに「おはようございます。」と大きな声で挨拶をしてくれる。私も負けじと大きな声で「おはようございまーす。」と返す。学校から帰ってくると、「お帰り。」と迎えてくれる。私は、見守られているようで安心する。また、おばあちゃんネットワークは強く、この地域の事なら、おばあちゃん達に聞けば大抵わかる。私のこともよく知ってくれている。「何で知ってるの？」と驚くこともあるが、自分を気にかけてくれていることは、嬉しい。さらに、いつも登校を見守ってくれるおばあちゃんは、私が朝集合場所にいないと、私の妹に、

「今日は、いろはちゃんはどうしたの？」

と聞き、心配してくれる。私達が安心してここに暮らしていられるのは、おばあちゃんパワーに支えられているからだと思う。「明るい社会」とは、こういう社会のことを言うのではないだろうか。

このおばあちゃんパワーには、もちろん私の祖母も入っている。私は小学生の時、祖母から更生保護女性会のことを教わった。祖母は、更生保護女性会の一員だった。小中学校を回ってお話をしたり、公民館祭りの時に啓発運動をしていたりした。その時に祖母が話してくれた「みんな一人一人が大事な存在なんだよ。」という言葉が今でも心に残っている。祖母が作ってくれた更生ペンギンのホゴちゃんとサラちゃんは、我が家のかわいいマスコットだ。ホゴちゃんとサラちゃんを見るたびに、祖母の言葉を思い出す。

私が安心できる地域に住んでいる一方で、社会では、残酷で悲しい犯罪がなくならないのが現状だ。私は、犯罪のない明るい社会にするためには、人と人とのつながりがとても重要なカギだと思う。

私は、学級委員に立候補したことがあるが二度も落選した。小学生の時は落ちたことがなかったから、落ちたときはみんなに認められていない気がして、クラスで自分一人だけが取り残されているように感じた。もう何もやる気が起きなかったし、何かをやっても誰かに笑われるような気がして苦しかった。落ちたことが悔しくて、怖くて、不安になって泣いていた時、担任の先生が声をかけてくれた。

「今、いろはさんはとても悔しいし、不安になっていると思う。でも、いろはさんはできる子なんだから、ここでなにもかもあきらめるんじゃないかな。」私はこの言葉に救われた。自分を見守ってくれる人がいるんだと胸が熱くなった。自分が独りになった気がして怖くて流していた涙は、嬉しさの涙に変わった。

犯罪は、ある特別な人たちが起こすものではない。誰にでも、犯罪者になってしまう可能性はある。そのきっかけは人それぞれだ。でも、そのきっかけから犯罪へと向かわないためには何が必要なのだろう。私は、先生が支えてくれたから立ち直ることができた。誰もが失敗や不安になる経験をし、自暴自棄になってしまうことはあるだろう。でも、そこでそのまま犯罪に手を染めてしまうか、立ち直って次に進むかの分かれ道となるのは、支えてくれる人がいるか、またその変化に気づいて手を差し伸べてくれる人がいるかだと思う。相手の変化に気づくにはどうしたらいいのか。私は知っている。これこそ、おばあちゃんパワーだ。そう「挨拶」をすること。

生徒会で人権についての取り組みを行うことになったとき、その一つとして「挨拶」が挙げられた。

「どうして挨拶が大切なんだと思う？」

と先生に聞かれ、私はハッとした。私は、それまで、挨拶はマナーとしてやるものという風にしか捉えていなかった。どうして挨拶をするのか、そんな事一度も考えたことがなかった。考えてみると、おばあちゃん達の挨拶から安心感が得られる理由がわかった。「おはようございます。」といわれたら「おはようございます。」と返す。短い言葉のコミュニケーションの中にも自分を見てくれている人が近くにいるということがわかるし、自分の存在を認めてくれていると実感できる。それが安心できる理由だ。また、挨拶は気持ちのバロメーターのようなもので、気持ちが挨拶の声色に現れて

くる。だから、ちょっとした変化に気づくきっかけにもなり得るのだ。

私は、自分が住んでいる地域が大好きだ。お互いのことをよく知っていて、何かあれば助け合う。誰もが安心して暮らすことのできる場所があるっていいなと思う。このような場所を社会全体にも広めていくために、私は挨拶を通じて人とつながり、誰かのちょっとした不安に気が付いたら、先生が私にしてくれたように、その人に手を差し伸べ、支えられるようにしていきたい。